

復活日（4月16日の福音朗読）

ヨハネの福音20章1-10節

1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけであるのを見た。2そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」3そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。8それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10それから、この弟子たちは家に帰って行った。

ギリシア語原文の逐語的な訳と構成

- 1 だが第一日に 週の
マグダラのマリアは 行く 早朝に
まだ暗がりがあるうちに 墓の中へ
そして 彼女は見る 石が 取り除かれているのを 墓から。
- 2 それで彼女は走る
そして 彼女は行く シモン・ペトロのもとに
そして 他の弟子のもとに イエスが愛していたところの
そして 彼女は言う 彼らに、
「人々を取り去った 主を 墓から、
そして 私たちは知らない どこに 人々が置いたか 彼を」。
- 3 それで出た ペトロと他の弟子は
そして 彼らは行きつつあった 墓の中へ。
- 4 だが走っていた 二人は 一緒に。
そして 他の弟子が 前に走った より速く ペトロより
そして 彼は行った 初めに 墓の中へ、
- 5 そして 屈んで 彼は見る 置かれているのを 亜麻布が、
けれども 彼は入らなかった。
- 6 それで行く シモン・ペトロも 後につきつつ 彼の、
そして 彼は入った 墓の中へ、
そして 彼は観る 亜麻布が 置かれているのを、
- 7 そして スダリオンが、 彼の頭の上にあったところの、
亜麻布と共に 置かれていないのを、
そうではなく 離れて 巻かれているのを 一つの場所の中へ。
- 8 それでそのとき 入った 他の弟子も 行った者 初めに 墓の中へ、
そして 彼は信じた。
- 9 なぜならまだ 彼らは理解していなかった 聖書を 次のことを
ことになって 彼は 死者たちから 復活する。
- 10 去って行った それから 家に 弟子たちは

① 語句の解説

1節▼「週の第一日に」。安息日の明けた日(週の初めの日)のことで、我々の「日曜日」になります。今週の福音の冒頭には「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに」(二〇一)とありますが、19節にも「その日、すなわち週の初めの日の夕方」とあって、復活したイエスの弟子への顕現を述べています(復活節第二主日)。ヨハネ福音書によれば、「空の墓」の出来事と弟子へのイエスの顕現は同じ日曜日の明け方と夕方に起きています。▼「墓の中へ」。この句は3・4・6・8節にも現れます。「墓」という言葉は、1・2節の「墓から」も加えると、7回も登場します。マグダラのマリアや弟子たちは、イエスの十字架の死によって、イエスとの関わりが終わったと思ひ込んでいます。未来に希望を失った彼らは、過去の思い出の中でイエスと関わりようとしており、彼らの関心は「墓」に向かっています。

2節▼「イエスの愛していた他の弟子」。この弟子は最後の食事の席でイエスの胸もとに寄りかかっており(二三25)、十字架のイエスは母マリアをこの弟子に託しています(一九26―27)。この弟子が誰であるかについては、さまざまな説明がありますが、誰か歴史的な人物を指すというよりは、弟子の理想像を描いていると考えるのが良いと思われます。もちろん、歴史的な人物が、しかも複数の人物が、このような理想像を描くきっかけを与えていることは大いに考えられます。ちなみに、共観福音書(マタイ・マルコ・ルカ)には、このような弟子についての記述はありません。▼「どこに彼を置いたのか私たちは知らない」。この表現は13・15節にも繰り返されています。過去の思い出に生きようとする彼女にとって、遺体はどうしても必要なようです。

5節▼「彼は見る」。イエスの愛する弟子はペトロよりも先に墓に着き、亜麻布が置かれているのを見ます。この「見る」は、1節の「彼女は見る」と同じ言葉ですが、6節の「観る」や8節の「みた」とは別の言葉です。「観る」や「みる」とはちがって、ここと1節の「見る」は、単純に「目に入った」といった意味だと思われれます。

6節▼「観る」。この言葉は「観察者・見物人」を意味する名詞から派生した動詞ですから、「観察する」の意味です。イエスの愛する弟子とは異なり、ペトロは、墓の中へ入り、その光景をじつと観ています。

7節▼「スタリオン」。四句節第五主日号を参照。顔をスタリオン(覆い)で覆われたラザロが、イエスの呼びかけによって墓から出て来たとき、イエスは「彼を解きなさい」と人々に命じました。イエスの顔を覆っていたスタリオンがすでに解かれているのは、イエスが死から解放されたことを暗示しています。

8節▼「みた」。1・5節の「見る」や6節の「観る」と異なり、ここには目的語がありません。この「みる」は、見たり観察したりした事物を突き抜け、その背後にまで入り込むような「みる」であり、「信じる」ことにつながっています。

9節▼「ことになっている」。神の計画を表す動詞です。この節は8節を説明しているのではなく、墓に走った行動を説明しているのだと思われれます。

② 構成の解説

第一段落

「彼女は見る…彼は見る」 マグダラのマリアはひとりで、明け方のまだ暗いうちに墓へと向かいます。彼女は墓から石が取り除けられているのを「見る」とあります。5節にも、墓に着いた愛弟子が亜麻布が置かれているのを「見る」とあります。この段落は二つの「見る」に囲い込まれています。さらに、1―2節ではマグダラのマリアの行動は、

墓へ「行く」

石が取り除けられているのを「見る」

「走る」

ペトロと愛弟子のもとへ「行く」

と描かれています。ペトロと愛弟子のもとに着いたマグダラのマリアは

「人々が主を墓から取り去った、どこに置いたか私たちは知らない」

と告げます。この言葉を境に、描写はペトロと愛弟子の行動に移ります。

彼らは「出る」「そして墓へ」「行く」

二人は「走る」

愛弟子が「前に走る」

愛弟子が墓へ「行く」

愛弟子が「見る」

これらの動詞は「出る」と「前に走る」を除いて、マグダラのマリアの行動を描くために用いられた動詞と同じです。マグダラのマリアがまず墓へ向かったように、墓へ行けばイエスに会えるはずでした。しかし、墓にはイエスはいません。

この段落ではマリアの言葉を挟んで、動揺するマリアと弟子たちの姿が描かれています。ちなみに、「人々が取り去った」は三人称複数形の動詞ですが、これを受動形の代用として取れば、「新共」のように「主が取り去られた」と訳すこともできます。過去の思い出にしがみつく彼らには、イエスの「遺体」は大事なようです。

第二段落

「墓の中へ入った」第二段落は墓の中でのペトロと愛弟子が描かれます。まずペトロが墓に入り、亜麻布が置かれているのを「観る」と述べられています。この「観る」は1・5節の「見る」とは別の動詞です。動詞が異なっていますが、意味は同じだと主張する人もいますが、「観る」という動詞は「観察する」という意味を持っています。「観る」という動詞の本来の意味を生かせば、ペトロは墓の中の様子を「じつと観ている」ことになります。だからペトロは愛弟子の目には入らなかった「スダリオン」が亜麻布とは別の場所に丸められているのも観ています。しかし、ペトロはまだこれらの出来事の意味は理解できていません。彼は墓の中の状況を観ることに留まっています。

「彼はみた　そして　彼は信じた」　ペトロが墓の中を観ているとき、愛弟子も墓の中へ入り、「みた、そして信じた」と述べられています。この「みる」は、1・5節の「見る」とも6節の「観る」とも異なる動詞です。ヨハネ福音書でこれら三つの動詞が使い分けられているとすれば、「みる」は「心の目で洞察する」ことを表します。さらに、ここには愛弟子は何を「みた」のか、その目的語が書かれていません。目的語がないということは、愛弟子は墓の中の光景に目を向けたのではなく、そこに示されている出来事の意味を「みて」、イエスの復活を「信じた」ということを表そうとしているのかも知れません。

第三段落

「なぜならまだ彼らは聖書を理解していなかった」　愛弟子が「出来事の意味をみて、イエスの復活を信じた」のであれば、「なぜならまだ彼らは聖書を、死者たちから彼が復活することになっていることを理解していなかった」という説明は、8節と矛盾するように見えます。しかし8節の主語は「他の弟子」つまり愛弟子であり、ここでは「彼ら」となっています。「彼ら」がペトロと愛弟子を指すのであれば、二人に共通する行動は墓へ「行き」、中へ「入った」ということです。ここにマグダラのマリアも含まれるなら、三人に共通するのは、墓へ「行く」ことです。イエスに会うために「墓へ行く」のは、イエスの復活を理解していないからです。「なぜなら」は、墓へ向かう人間の無理解を説明しているのかも知れません。

③まとめ

日曜日の朝早く、マグダラのマリアは墓へ行き、イエスの遺体がなくなっているのに気づきます。マリアからその知らせを聞いたペトロと愛弟子は、墓へ向かってしまいます。彼らはまだイエスの復活を理解していなかったからです。

イエスはどこに (1-5節)

日曜日の朝早く、マグダラのマリアは墓に行くとき、墓から石が取り除けられているのに気づいて、ペトロと愛弟子に「人々が主を墓から取り去った。どこに彼を置いたか私たちが知らない」と告げます。イエスは確かに「墓から」取り去られました。しかし、神が取り去ったとは知らない彼らは、「人々が取り去った」と思い込んでいます。「墓から取り去られた」イエスに出会うためには、墓に行つてはならないはずですが、イエスがいま「どこに置かれているのか」分からない彼らは、「墓へ」と向かいます。

先に着いた愛弟子は亜麻布が置かれているのを「見」ますが、中へは入らず、ペトロを待ちます。
みて、信じる（6―8節）

遅れて到着したペトロは墓に入り、亜麻布だけでなく、イエスの頭を覆っていたスダリオンが亜麻布とは別のところに丸められているのを「観ます」。ここに使われた動詞「観る」は詳細に観察するといった意味です。このとき愛弟子も墓に入り、彼も「みる」ことになりましたが、何を「みた」のかは明記されていません。ペトロが到着する前に、彼が「見た」のは置き去りにされた亜麻布でした。ここに使われた動詞「みる」は、「見る」とも「観る」とも違う動詞です。墓に入った愛弟子が「みた」ものは事物や状況ではなく、出来事が指し示す意味なのです。ですから、彼はみて、「信じたのです」。「墓から」イエスが取り去られたことの意味を愛弟子は悟りました。目の前に起きている出来事を「見たり」（1・5節）、「観たり」（6節）しても、その意味を理解できるとはかぎりません。物を見る目とは別の目が、出来事の意味をみさせてくれます。この弟子は「イエスの愛していた弟子」（2節）でした。自分がイエスに愛されていたことを、そしてイエスが今も愛していることに彼は気づいたのです。イエスの愛に支えられて、彼はイエスの復活を信じる者となります。

まだ理解していない（9―10節）

マグダラのマリアも、ペトロも愛弟子も「墓へ」向かいました。しかし「墓から」イエスは取り去られていました。9節の「死者たちから」は「墓から」と同じ前置詞で表現されています。「死者たちからイエスが復活する」ことを理解していれば、「墓へ」向かうのではなく、「墓から」出てその外へと向かったはずです。イエスの復活は人間の理解を超える出来事でした。復活を理解できない人間は、どこへ行くべきかが分からず、「墓」へと向かいます。

今週の福音のまとめ

イエスは十字架の上に死にました。しかし「見て、観る」だけでなく、「みる」ことに気づいた者は、もうイエスを捜して墓へと向かう必要はありません。イエスは死んで復活し、墓のそばで泣いているマグダラのマリアに、そして家に閉じこもる弟子たちに現れます（20・11―29）。イエスは私たちのそばに来て、共に食事をし、ご自分の復活を悟らせてくれます。